

# 派遣法の抜本改正で雇用を守るルールを！



新宿駅西口で、「なんでも相談会」を開きました。  
(08年12月23日)

大量解雇で非正規労働者が苦しんでいるなか、「年越し派遣村」が大きな注目を集めました。私は十二月三十一日、年越し派遣村を訪れ、駆けつけた志位和夫委員長と行動をともにしました。相次ぐ大量解雇は、労働法制の規制緩和が引き起こした政治災害です。政府の責任が問われています。

大企業には、雇用を守る社会的責任があります。



「年越し派遣村」を訪れた志位和夫委員長(右)とともに、長野県の共産党から届いた援助物資のリストを見ているところ。左は、笠井亮衆議院議員。  
(日比谷公園・08年12月31日)

「年越し派遣村」に到着した時にはすでにテントが若いスタッフの方々の手で設営されていました。私と同世代の方を含め、職や家を失った方々が数多く詰めかけていて、見慣れた日比谷公園の都心のオアシスのどかさとはまったく違った、緊迫した光景でした。

たくさんの米や野菜など、全国から届いた支援物資を手際よく炊き出しにしていた女性たちや、医療健康相談にあたる医療関係者の方々の姿もありました。

大企業の一方面的な首切りに対して「やらねばなし」ではなく、手をつないで立ち上がる、反貧困ネットワークのこの間の共闘の力、国民の底力に胸打たれました。

大企業には莫大な内部留保

雇用を確保する十分な「体力」があります

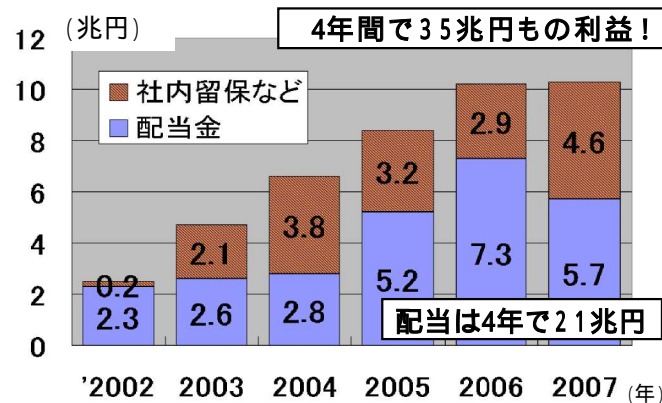
大企業は、金融危機から始まった急速な景気後退に直面し、「赤字でたいへんだ」といいます。しかし、大企業はすぐに倒産するような状況ではありません。

「派遣切り」を行っている大手の製造業だけでも、この四年間の純利益は三五兆円になります。そのうち、株主配当は二一兆円。内部留保も、十八兆円増え、その額は、約百二十兆円にもなります。

大企業は、人件費の安い非正規労働者を雇い莫大な利益をため込んできました。雇用を継続する体力は十分にありまます。

大企業は、雇用を守る社会的責任を果たすべきです。

## 製造業の大企業の純利益と配当金



財務省「法人企業統計調査」による。資本金10億以上の製造業の法人企業。純利益=配当金+社内留保等(役員賞与+自社株購入などを含む)

働く人を大切に、当たり前前の政治を！

厚労省によると、今年三月までに解雇される非正規社員は八万五千人以上。事は緊急を要しています。

政府の責任で、職を失ったすべての人々に住居と生活と仕事を保障すること。これ以上の「非正規切り」の被害者をださなさいための緊急措置をとること。

使い捨てを止めさせるため、派遣法を抜本的に改正することが不可欠です。

「年越し派遣村」には、様々な人々が手をつなぐ社会的連帯がありました。今年の総選挙、都議会議員選挙で勝利し、雇用と命を守る政治を実現しなければ！の思いをいっそう強くしていきます。



日本共産党衆議院東京1区  
国政対策委員長・若者相談室長

富田なおき

事務所ニュース

15 2009. 2. 1

発行：富田なおき事務所

〒162-0065 新宿区住吉町11-25

TEL 03-3357-3392 FAX 03-3353-4912

E-mail: tomita-naoki@nifmail.jp

元日から、東京1区を元気いっぱい駆け巡りました



民青同盟、かえるネットとともに、新成人のみなさんに訴えました。  
(新宿区京王プラザ前・1月12日)



飯島和子千代田区議とともに、朝の宣伝行動を行いました。  
(千代田区・1月6日)



「港新春のつどい」に、おおつか未来さん(雇用・福祉の相談室長)、笠井亮衆議院議員とともに参加。  
(港区・1月20日)



おおつか未来さん(雇用・福祉の相談室長)、星野たかし港区議、支部のみなさんとともに氷川神社で深夜0時に。(港区・1月1日)



大山とも子都議、沢田あゆみ新宿区議、近藤なつ子新宿区議とともに、穴八幡社まででの新年のあいさつ。(新宿区・1月1日)



千代田原水協のみなさんと、神田明神へ初詣の方々に核兵器廃絶署名を訴えました。  
(千代田区・1月1日)

日本共産党の専従活動家として

「日本共産党の専従活動家を考えてみないか」といわれたのは、大学四年生のときでした。入党して半年、日本共産党が政治のなかで果たしている役割に確信を深めていました。

職業として共産党の活動家を選ぶということに、行きつ戻りつ考え、「この党を大きくすることが社会を変え、政治を変える力になる」と、この道を決意しました。

そのころ、就職のことを心配し両親が上京してきました。自分の考えを話すと、

両親は驚き猛反対でした。共産党に対する偏見が根強いなか、両親が心配するのにも無理もないことでした。息子のことを思つての意見だけに、親の反対は辛いことでした。しかし、「誰かがやらなければならぬ仕事」「父も母も、必ず分かってくれる時が来る」と自分に言い聞かせました。

一九九八年の春、千代田地区委員会に勤務し、新しい生活を開始しました。一番長く勤めたのは、「赤旗出張所」です。

毎朝、三時過ぎに起き、



届いたばかりの日刊紙を仕分けし、配達員を起し、自らもバイクに乗って配達にでる忙しさ。「自転車やバイクがパンクしていないか」「雨の日に使つていいか」「雨の日に使つていいか」「雨の日に使つていいか」などにも気を配ります。

千代田区には、個人の読者だけでなく、各官庁、大企業本社が多く、「赤旗」を購読しています。様々な読者に確実に届くよう気をつかいました。

いま、日本共産党が新た

な注目を集め、その活動が政治を動かしています。「赤旗」は、たくさんの方々の手で支えられます。運動を支え励ますとともに、家族みんなで楽しみ、役にたつ新聞として定評を得ています。大災害のときに被災者支援の輪を広げるのにも大きな力を発揮しているのが「赤旗」です。

いま、「派遣切り」という政治災害が大問題となっています。「赤旗」がより多くの人に読まれ、真実がもっと多くの人々に直接伝わることを、それが、問題解決の大きな力になると、日々実感しています。

日々実感しています。

富田なおきの生いたち